

氏名	はま 濱	なか 中	はる 春
学位(専攻分野)	博士(文学)		
学位記番号	文博第106号		
学位授与の日付	平成10年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
研究科・専攻	文学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻		
学位論文題目	シラーにおける風景について		

論文調査委員 (主査) 教授 山口 知三 教授 喜志 哲雄 助教授 松村 朋彦

論 文 内 容 の 要 旨

18世紀のヨーロッパでは、文学や芸術をはじめとするさまざまな分野で風景に対する関心の高まりがみとめられる。本論文は、こうした時代状況のなかにフリードリヒ・シラー(1759~1805)の文学と思想を位置づけることによって、風景という視点を通してシラー像を描き出し、同時にまたシラーを介して風景をめぐる諸問題に照明を当てようという試みである。全体は、序と本論五章、および結語より成っている。

第一章ではまず、風景にかんする研究史が概観される。近年のドイツ語圏における風景研究は、哲学、文学、美術史、建築学、地理学などのさまざまな分野間の交流や新たな観点の導入によって、ますます多様化する傾向にある。そのなかでもとりわけ重要な論点として、風景という概念とその成立、理想的風景の歴史の変遷、風景の表現、風景の知覚という四つの問題をあげることができる。こうした問題点と、シラーと風景とのかかわりにかんする数少ない先行研究をふまえたうえで、本論文の第二章以下では、風景の知覚、風景の記述、風景と自然、風景と歴史という四つの主題が順をおって論じられることになる。

第二章では、18世紀における風景の知覚のあり方が問題にされる。イギリス式庭園が流行し、旅行人口が飛躍的に増大したこの時代の風景把握の特徴は、風景を絵画として眺める見方にある。そこでは、風景は枠によって一定の範囲に限定され、見る者と見られるものとのあいだに距離が生み出される。こうした風景の見方は、シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』(1804)にもみてとることができる。この作品の背景をなしているスイスの風景は、当時の旅行記や文学作品を通じて類型化されたものであり、それを劇場で見る観客は、額縁舞台の枠と、そこから必然的に生じる距離によって、舞台のうえの風景を絵画として眺めることになる。すなわち劇場は、現実の風景の見方を人工的に再現する場なのである。こうした絵画的な見方の前提をなしているのは、「見る—見られる」という主客の分裂と支配の関係を作り出す一方向的な視線である。しかし、『ヴィルヘルム・テル』では、こうした一方向的な視線だけではなく、双方向的な視線をはじめとする視覚の多様なあり方が示されることによって、支配の関係は相対化される。そこにはまた、視覚と競合し、時には視覚を越える聴覚の働きが加わることによって、舞台と観客は一つの空間へと統合されるのである。

第三章では、風景の言語表現をめぐる問題点が考察される。18世紀の牧歌や旅行記には、対象をあますところなく言葉によって記述したいという欲求をみとめることができる。しかし、風景描写においてしばしば用いられる類型や比喩は、逆に言語化の限界を物語っている。風景の美的価値をたたえる決まり文句である「言葉にできない」という言葉は、言語化の空転を何よりもあざやかに示しているのである。一方、シラーの理論的著作にみられる言語観は、美的自律性の問題から歴史哲学へと思索が進むにつれて変化しており、『マティソンの詩について』(1794)がその転換点に当たる。『カリヤス書簡』(1792)では透明な記号としての言語による表現が求められていたのに対して、『マティソンの詩について』では音楽を模範とする象徴的な表現が求められている。この二種類の言語表現は、『素朴文学と情感文学について』(1795-96)では、それぞれ古代と近代、素朴詩人と情感詩人にふさわしいものとされている。シラーの「音楽的詩」の構想は、言語化の不可能性

を克服するための風景の言語表現の新たな試みでもあったのである。

第四章では、シラーの詩『逍遙』（1795/1800）の読解を通じて、風景と自然との関係が論じられる。風景は、科学技術によって近代社会から失われた自然を美的に回復する役割をもち、風景体験は、近代人の文明批判と自然への憧れの現れであるという考え方があつた。これを風景の補償モデルと呼ぶなら、それは『逍遙』や、18世紀の他の牧歌にもあてはまる。しかし、この作品の風景描写を分析してみると、風景を知覚し記述することそれ自体が人間による自然の支配となつてゐることがわかる。すなわち、補償モデルは、科学技術による自然支配によって失われたものを、風景を媒体とする美的な自然支配によって取り戻そうとするという矛盾を含んでゐる。この矛盾は、補償モデルの内部にゐる人間には意識されず、補償モデルの全体像を外側から客観的に見ることによつてはじめて明らかになる。『逍遙』は、風景を眺める逍遙者の視点のほかに、その逍遙者を外から見るもう一つの視点を最後に置くことによつて、補償モデルに対して批判的な反省をおこなつてゐる。こうした視点の二重性が、シラーの詩と同時代の多くの牧歌との相違点をなしてゐるのである。

第五章では、シラーの歴史哲学における風景の位置が確認され、彼の新たな牧歌の構想が『ヴィルヘルム・テル』との関連で検討される。『逍遙』の詩に登場する逍遙者が、文明を全面的に否定し、自然に憧れ、過去への退行を願うのに対して、シラー自身は『素朴文学と情感文学について』のなかで、文明という段階を経たのちに未来においてより高次の自然へ回帰するという螺旋状の歴史観を提示してゐる。同様に彼は、アルカディアという過去の黄金時代を歌う牧歌に対して、エリュシオンという未来の理想世界へ人間を導く新たな牧歌の構想を語つてゐる。『ヴィルヘルム・テル』は、これまでしばしばアルカディアからエリュシオンへの変容という観点から解釈されてきたが、ここで登場人物を構成する貴族と農民という二つの層の相互関係に着目するなら、当時のスイス観にしたがつた自由なアルカディアという牧歌の成立過程が描かれてゐることがわかる。しかし、最後の場面でテルは、自分自身も罪の意識に苦しみながら、アルカディアにとどまることのできない皇帝殺害者パリチーダに、エリュシオンとしてのローマへの道を言葉で示す救い手となる。ここには、シラーにとってのエリュシオンの牧歌の可能性が重ね合わされてゐる。言葉による救い手テルにパリチーダの行方を知ることができないのと同様に、詩人シラーにとつてもまた、牧歌の完成は受容者にゆだねられてゐるのである。

結語では、シラーと風景とのかかわりが総括される。風景に対するシラーのまなざしの独自性は、風景を享受する視点とその行為自体を反省する視点との共存にある。『ヴィルヘルム・テル』の受容史が暗示してゐるように、シラー自身のうちでも、アルカディアへの憧れとエリュシオンへの意志とはせめぎあつてゐる。この二つの視点の相克のために、エリュシオンの牧歌は完成にいたつたことはない。しかしまた、こうした視点の二重性こそが、風景や牧歌をめぐる省察を可能にしてくれるのである。

論文審査の結果の要旨

シラーはスイスを一度も訪れることなく『ヴィルヘルム・テル』を書いたという有名なエピソードが端的に示してゐるように、従来からこの詩人は、「眼の人」ゲーテとは対照的に、観念の世界の住人として論じられることが多かつた。だが他方、近年の18世紀ドイツ文学研究においては、この時代を単なる理性と啓蒙の時代としてではなく、理性と感性、精神と身体との関係が新たに問ひなおされた時代としてとらえようという傾向が顕著にみとめられる。本論文は、こうした最新の研究状況をふまえて、シラーの文学と思想に新たな照明を当てようという試みである。18世紀ドイツにおける風景への関心については多くの論考が発表されてゐるなかで、シラーと風景とのかかわりにかんしては、日本はもとよりドイツ語圏でもまだまとまつた研究はほとんどなされてゐないだけに、本論文はきわめて大きな意義をもつものである。

本論文のすぐれた特色として、次の点をあげることができる。

1) 近年ますます学際的な性格を強めつつある風景研究の動向をふまえて、論者は文学研究の分野のみにとどまらず、美術史、思想史、文化史などのさまざまな分野における最新の研究成果を幅広く取り入れて議論を展開してゐる。従来の文学研究において風景が論じられる場合、個々の風景描写のもつ意味内容に重点がおかれることが多かつた。それに対して本論文では、風景の内容だけでなく、それがどのように知覚され、記述されるかという形式にかかわる側面にも十分な配慮がなされ、そのうえで、18世紀における風景への関心それ自体がはらんでゐる問題点が、歴史的な見地から明らかにされてゐる。

2) 本論文のもう一つの特徴は、シラーの文学と思想を、18世紀ドイツ文学全般におよぶ広い視野のもとにとらえようとしている点にある。そこでは、ブロッケス、ハラー、エーヴァルト・クライスト、ウーツ、ゲスナーといった従来あまり論じられることのなかった詩人たちの作品が積極的に取り上げられ、また狭い意味での文学作品ばかりではなく、旅行記や美学書、庭園理論書といったさまざまな種類のテキストが引き合いに出されている。こうして同時代の他の作家や作品と比較対照することによって、シラーの風景観の独自性が浮き彫りにされるのである。

3) だが、本論文の最大の成果は、風景という視点からシラーの文学作品に精緻で斬新な読解を試みた点にある。なかでも、『ヴィルヘルム・テル』における視覚と聴覚の諸相を分析した第二章第三節、『逍遙』の最後の詩句から風景に対するシラーの視点の二重性を析出した第四章第三節、『ヴィルヘルム・テル』の最終場面をシラーの新たな牧歌の構想との関連で再検討した第五章第二節は、それぞれ欧米におけるシラー研究の最新の成果を援用しながらも、独自の観点から新たな解釈を提示したのものとして高く評価することができる。

とはいえ本論文にも、今後の課題としてさらに望まれる点がないわけではない。

第一に、本論文をシラー論として見るとき、取り上げられる作品の数が限られており、とりわけ初期から中期にいたるシラーへの言及がほとんど見られないことに不満が残る。これはむしろ、本論文中でも述べられているように、シラーの風景にかんする記述や考察がもっぱら後期に集中しているためである。だが、ここでは論じられていないシラーの他の作品や論考をも視野におさめることによって、論者の主張はいっそう説得力を増すことであろう。

第二に、シラーにおける風景の問題を論じるためには、さらにまだ考慮すべきいくつかの問題が残されているように思われる。『素朴文学と情感文学について』がゲーテに対する強い対抗意識のもとに書かれたことを考えるなら、シラーの牧歌の構想を理解するうえでも、ゲーテとの比較は重要な論点となろう。また、シラーの美学とカント哲学との関係は、従来からしばしば論じられてきたテーマではあるが、シラーの風景論を考えるさいに、カントの崇高美学とのかかわりはやはり看過することのできない問題であろう。

論者が今後こうした点にも十分な目くばりを行き届かせ、いちだんと包括的なシラー論を完成させることが期待されることである。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。1998年3月3日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。